

負の哲学

Negative Philosophy

川田建設(株) 代表取締役専務
Managing Director

「哲学のない政治家は国を滅ぼす」とは政治評論家の伊藤昌哉氏の論であるが、もしそうであればその政治家を選んだ我々国民一人一人にも哲学がなく、大きなそして取り返しのつかない代償を払うことになる。参院選も終わり一段落と思えるが、何か先行き不透明な厭な予感が脳裏から離れない。我国は外圧がなければ大改革は不可能な国柄であるが、今度こそはと期待はするものの、陸続きの国境がない日本はまだその危機感が薄く、金融ビッグバンだ、やれ行財政改革だのと大合唱が続いているが、内容のある改革は一向に進んでいない。当然それは日本古来独特の文化といわれる村社会から発生している運命共同体的な考え方であり、経年とともに改革すべき必要性を自他ともに自覚しつつも、村社会の中で周囲とのバランスを考え改革の行動も起こせず、ジレンマを感じながらも可能な限り先送りする「怠惰性症候群」という不治の病に罹ってしまったのが原因ではないだろうか。そしてこの不治の病の後にはカストロフィー現象が待ち受けていることを知りつつも、なおも行動を起こせない。今日こそ我々は与えられた最後のチャンスと思い、今までの考え方を変え歴史と哲学を上手に活用しこの不治の病を快癒する方法を生み出さなければならない。

私が哲学を意識したのは学生時代に遡る。あれから現在まで私の人生に非常に役に立っているのがやはり「哲学」すなわち「モノの考え方」である。そこでソクラテスは「モノの考え方」には「積極的な考え方」と「消極的な考え方」の二つの考え方があると論じている。私はそれ以来「積極的な考え方」を「正の哲学」、「消極的な考え方」を「負の哲学」と名付けている。

今日社会はあまりにもこの「負の哲学」的思考に片寄りすぎてはいないだろうか。ここで我々は原点に戻り「自然と人間」について真剣に考え直さなければ人類の幸せなどは遠のくばかりである。したがってこの日本の病、すなわち「怠惰性症候群」からの脱出は、我々が個々に持つ「負の哲学」を「正の哲学」に変える以外に打つ手はないのではないだろうか。そして政治、経済、

大桶 邦夫
Kunio OHTOI



教育、環境と荒れ放題の日本を救うためにはまず我々の意識改革から始めなければならないと思う。そのためには真の哲学者、宗教家、立派な人生を送っておられる方々の実践的で積極的な活動を大いに警鐘として真摯に受け入れる時代が到来したと思う。自国の安全を他国に依存し平和を享受し飽食に馴れ真の目標と汗することを忘れた結果が現在の日本の姿ではないだろうか。そして政治、経済等の失敗から不況になるとやれ政治が悪い、役人が悪いと寄ってたかつて騒ぎたてるが、その責任は我々国民一人一人に起因する「負の哲学」の結末である。日本には負の哲学的諺、すなわち「出る釘は打たれる」という諺があるが、その諺そのものが、「村社会」組織保全のために考え出されたもので、今日の言葉を借りるならば「護送船団方式」なのである。当然時代の流れとともに改革しなければならないことでも、この「怠惰性症候群」からの脱出を試みようとする、時として人為的なネガティブ要因が働くような仕組みになっていることは歴史が物語っている。

21世紀を目前にし、今我々は過去の足跡と現実の真の姿を正しく認識し日本再生のために「積極的なモノの考え方」すなわち「正の哲学」を実行に移さねばならない。そのためには、まず我々は負の意識を正の意識に変えなければならない。意識が変われば行動が変わり、行動が変われば自ら結果が変わってくる。その意識を変えるにはまず第一に小さな目標からの行動、すなわち第一歩を踏み出すことにある。そして目標に向かって、必ず目標は達成されると確固たる信念と行動が持続できれば、負の意識を変えることは容易に可能であると思う。自分の仕事が社会のため、人のために役に立ち自分の仕事に喜びを感じ健康で働ける、そして汗した結果に「感動」を覚える。どんな仕事でも汗と感動は実に清々しい気分であり最大の良薬である。我々凡人は名誉や、地位や、財産を人生の第一の目標とする考え方が戦後教育の中に潜在していたと思う。このような目標は自分のやるべき仕事を確実に実行した結果として後から付いて来るもの

で、決して人生の目標とすべきではないと私は考えている。

戦後の日本は復興という大目標一筋に走り続け、年月の経過とともにいつの間にか「負の哲学」を身に付けてしまった。それは名誉や、地位や、財産といった目標にだけ大多数の人が異議を唱えることもなく、人と人との絆、道徳、そして正しい人間としての目標を忘れさせる「怠惰性症候群」という病魔に侵され蔓延し、一流大学、一流企業、重厚長大などと謳い囃され、初心を忘れ、群集心理という大きな泥沼に落ち込んでしまった。そして政治、経済、社会状況等に不安が生じるにつれて若年による犯罪も増加し、今の言葉でいえばキレてしまっている若者も増加している。これに対し我々は自分の行動も省みず若者の行動云々と批判したとしても、決して若者は反省などするはずがないと思う。それは若者は我々大人の姿、大人の社会を見ながら育ってきているからである。この事実は我々大人の責任として率直に認め、深く反省し、日常生活の中で実際の行動によって範を示す以外に方法はないと思う。特に道徳などは学校に任せるべきものではなく、親が責任をもって教育するのが当然の義務ではないだろうか。親は共働き、子供は鍵っ子、学校から帰ると塾通い、帰れば自室でオヤツを与えられゲームに熱中し外で遊ぶ場所も友達にも恵まれない。

食事は肉食中心の欧米型、惣菜はスーパーの出来合い、多くの添加物が含まれているのを知りつつ食べる。空気、土壌には環境ホルモンなどといわれるおまけまで付いている。これで子供の健康など保たれるだろうか。知れば知るほど、近い将来の日本人の健康、体力はいったいどうなるだろうか、と恐ろしくなるばかりである。これらすべてが誤った目標と「負の哲学」の結果でなければ何であろうか。だが現実はどこに責任があろうとも自分の体は自分で守るしかないと思う。それには日本古来の食生活を基本とし、科学的に解明された必要確実なものを取り入れ改善を加えながら、日常生活の中に習慣として継続することが大切ではないだろうか。だがどんな立派な哲学を持っていたとしてもそれを実行しなければ何も達成できない。自分としては自信のある自分の哲学だと思っただけでも「正の哲学」の場合と「負の哲学」の場合とではその結果は歴然と異なってくる。私には明暗を分けた二人の知人がいる。K氏とR氏である。

K氏は40年近くも「株式相場」の経験を持つセミプロであり、仕事よりも株式絶対優先主義を通した兵であったと私は思っている。「もし君が将来金銭的に困ったことがあったらいつでも来い。何億でも無利子で貸してやるから。」といわれ、男の約束をした記憶が残っている。特にバブル最盛期などは我が世の春を謳歌したに違いない。だがバブル崩壊後は出会いもなく、彼の噂は遠く消えてしまった。願わくは大財産を残し幸せな人生を送

ていることを望むのみである。一方、R氏の方は40数年前の上司であるが明るい性格で楽天主であり、少々頭に血が上るのが早過ぎる傾向がある人であるが、何事にも積極的な行動力は抜群であった。「仕事は好きでないと良い仕事はできない。金なんか食うだけあれば充分だ」といつも啖呵を切っていた。現在は新宿の一等地で悠々自適、本屋通いと読書三昧、86才で奥様と元気に幸せな生活を送っている。このK氏とR氏はお互いそれぞれの自信ある自分の哲学をもって歩んできた人生の結果である。人間は都合の良い生き物で常に「積極的な考え方」と「消極的な考え方」の両方を持ち合わせている。そして自己の持つ意識によって選択され行動によって表現されている。この意識という二文字はマスコミ、官、民、問わず常に話題になり、どこへ行っても「意識改革」の大合唱である。ではどうすれば意識を変えることが可能か、具体的な示方書はあまり見かけない。

私は第二には自己の人生目標の再確認にあると思う。すなわち「積極的な考え方」でかつ正しい判断による目標設定であったかどうかである。またその目標は不変的なものでなければならない。我々人間はこの地球上に生まれ自然の中で自然によって生かされており、時間も、空間も、水も、光も生きるために必要なものはすべての人に平等に与えられている。ただ食糧等の問題は一部の為政者の仕業であり、地球上に住む人々の英知によって必ず解決されると思う。よく自分は運が悪いとか財産に恵まれないとかと愚痴をこぼす人に出会うが、正に「負の哲学」的発想の生き方である。ここで「正の哲学」的諺に「いつまでもあると思うな親と金、ないと思うな運と災難」とある。実に見事な表現ではないだろうか。運というのは自分の行動によって変えられるものであると私は思うし事実そうである。その要因は自分の積極的な考え、積極的な行動、そして人との出会いである。人生一生の中には自分にとって非常に都合の悪い大波が次々と押し寄せて来ることが必ずある。この大波を上手くかわすのが人生だとすると、大波が来ることが決まっているのだから、自分の「人生行程表」の中に前もってその規模と時期を想定し対策を立てインプットさえしておけば、どんな不況が来ようとバブルが来ようと、自分の計画した「人生行程表」どおりに世の中が動いていることになる証ではないだろうか。我々橋梁技術者は、特に設計施工と詳細な「作業工程表」を作り、手順どおりに作業を進めるのが専門である。それならば自分の「人生行程表」だって「積極的なモノの考え方」によって立派に作れるのではないか。何も悩むことなどない。悩みなどは行動によって喜びに変えてしまえば良い。こんな人生の目標を立て人生を送ることができれば「負の哲学」は自然と意識の中から消え去ることだろう。